人間学を学ぶ月刊誌

[chichi]

致知

⑫ 2018 December

おかげさまで創刊40周年

[特集]

古典力入門

竹村亞希子 易経研究家 &
安岡定子 こども論語塾講師

出口治明 立命館アジア太平洋大学(APU)学長 &
數土文夫 JFEホールディングス特別顧問

致知随想

題字・三井住友銀行元会長小山五郎氏

上田頼飛（デフバスケットボール男子日本代表監督）
イゲット千恵子（国際起業家／CEOキッズアカデミー代表）
近江政斗（函館榎本武揚を顕彰する会代表）
平野甫光（書家）
高橋利一（至誠学園名誉学園長）

掲載順不同

人に頼る前に頼られる人になれ

上田頼飛

「こんなレベルで日本代表か？」「聞こえないだけで代表になれるのか」

三年前、知人の誘いで訪れたストリートバスケットボールの試合。そこに登場したデフバスケットボール日本代表の選手たちを前に起こった観客の声に私は愕然としました。

デフバスケットボールとは、聴覚障碍者が行うバスケットボール競技です。耳の聞こえない選手たちに心ない野次が投げつけられ、私は込み上げる怒りを抑えることができませんでした。

何とかして彼らの役に立てないだろうか。そう考え、ご縁をいただいてデフバスケットボール男子日本代表監督に就任したのは二〇一五年、三十二歳の時でした。

日本代表監督就任以前は、健常者のバスケットボールコーチとして十九歳から活動を続けてきました。五年間外部コーチを務めた大阪の西成高等学校では中央大会に出場。その後も私学の指導者を務め、上位の成績を残してきました。

そんな私が直面したのは、あまりにも環境の整っていないデフバスケの現実でした。試合を組めば健常者の高校生にも負けてしまう。選手たちは居心地のよい環境にしか自分の身を置こうとせず、面倒なことが起きると返答がなくなったり、紹介した練習場所や職場をすぐに辞めてしまったりする。日本のトップ選手としての振る舞いも、それに見合ったものではありませんでした。これでは支援されなくて当然だと痛感したのです。

さらにショックだったのは、監督就任後、初の世界大会で、あれほど一所懸命に伝えたつもりの指導が、彼らには全く伝わっていなかったことです。

自分の指導法にも問題点はありましたが、選手たちは聞こえないという問題以前に、相手と向き合うことを避け続けてきたのだと思いました。

〝障碍者団体だから〟温かい目で見てあげようという周りの目を変えて、純粋に一人の人間として憧れられる選手を育てることが最重要課題だと感じた私は、彼らの「やってもらって当たり前根性」を何とかして叩き直さなければと決意したのです。その思いを実現するべく「人に頼る前に、頼られる人になろう」と呼び掛

学びてのち足らざるを知る

近江政斗

明治維新後、乞われて新政府の北海道開拓使に仕官したのを手始めに、駐露特命全権大使として樺太・千島交換条約の締結を実現。さらに駐清特命全権大使当時には、清朝の李鴻章との会談に臨む伊藤博文を補佐し、天津条約締結にも尽力している。六か国語を操るほど語学に堪能だったことが、外交に役立ったことは言うまでもなかろう。

また、内閣制度が日本でも始まると、三人の内閣総理大臣のもとで、逓信大臣、農商務大臣、文部大臣、そして外務大臣を歴任している。

一方、旧幕臣の子弟に対する奨学金制度（徳川育英会）を立ち上げた他、東京農業大学の前身となる育英黌も創設。気象学会の会頭をはじめ、電気学会及び工業化学会の初代会長に就任するなど、日本の学術研究振興にも寄与していたのだから、まさに八面六臂の活躍であった。

何を隠そうこの人物こそ、幕臣の家に生まれ維新動乱期を生き抜いた榎本武揚その人である。榎本と言えば、一般的には海軍副総裁として函館五稜郭を占拠し、最後まで新政府軍に抵抗した人物として知られてきた。

もっとも、「二君に見えず」という武士道精神に反するとの評価に押されてか、明治期以降における榎本の功績はほとんど知られていない感がある。かく言う私もまた、地元函館で生まれ育ったものの、榎本武揚に関する知識は、正直、人並み程度しか持ち合わせていなかった。

そんな私に転機が訪れたのは七年ほど前のこと。経済視察団の一員として訪れたメキシコで、ガイドから榎本武揚の名前を耳にしたのがきっかけだった。なぜ、榎本の名が異国の地で語り継がれているのか。私は驚きとともに好奇心を掻き立てられ詳しく聞いてみたところ、新天地を求めていた当時の日本人に、主に中南米への移住を促したのが他ならぬ榎本だったのだ。

日本政府による移民政策の先鞭をつけたという点からしても、その先見の明に私は目を見張った。帰国後、七十三年にわたる榎本の生涯をつぶさに辿ってみると、その遺した功績たるやどれも注目に値すべきものばかりだったことにも私は驚かされた。

地元縁の偉人を顕彰せんと、会社経営の傍ら「函館榎本武揚を顕彰する会」を立ち上げたのは、当時榎本に感嘆しきりだった私にとって、いま思えば必然だったのかもしれない。五稜郭にほど近い梁川公園内に榎本の胸像を建造するなど、地元を巻き込んだ顕彰活動は現在も続けている。

榎本武揚は天保七（一八三六）年、いまの東京都台東区で生まれた。幼名を釜次郎という。父親は若くから天文学を志し、伊能忠敬の筆頭内弟子として「大日本沿岸輿地全図」作成に参加したこともある人物だった。後に十一代将軍徳川家斉の御付となったことが、息子釜次郎をして幕府側の人間であるという意識を醸成するのには十分であった。

昌平坂学問所で学んだ後、函館奉行堀利熙の従者として函館に赴任したのが、北海道を知る最初のきっかけとなる。安政二（一八五五）年に設立された長崎海軍伝習所に二期生として学ぶ頃から次第に頭角を現した榎本は、卒業後には若くして築地軍艦操練所の教授を拝命している。

人生の転機となったのは、足掛け五年に及ぶオランダ留学であった。現地では寸暇を惜しんで船舶運用術、砲術、蒸気機関術、化学などを次々と修めたが、特に国際法について熱心に学んでいる。オランダ人講師から『海の国際法規と外交』をわざわざ手土産に持たされたことからも、榎本の熱心さが窺い知れよう。

しかし、留学期間を終え、横浜港に辿り着いた榎本を待っていたのは瓦解寸前の徳川幕府だった。さらにその僅か半年後に「大政奉還」が行われると、薩長を中心とした連合軍と旧幕府軍との対立はもはや避けがたいものとなってしまっていた。

徳川慶喜が官軍に対して恭順の姿勢を崩さない中、榎本はあくまで徹底抗戦を主張する。江戸城無血開城に至っては、軍艦四隻と輸送船四隻の艦隊を編成すると、品川沖から仙台港に寄港し、一路北海道函館へ。約三千人に膨らんだ旧幕府軍を率いて函館五稜郭を占拠すると、ロシアの侵略に備えて蝦夷地を開拓するという目的を掲げて「蝦夷共和国」を樹立したのだった。

しかし、それをよしとしない新政府軍の猛攻によって旧幕府軍は後退を余儀なくされること半年、ここで一つのドラマが生まれた。新政府軍の参謀黒田清隆からの降伏勧告書が届けられた時のこと。榎本は拒絶の旨を伝える際、大

切にしていた『海の国際法規と外交』を添えて、今後の日本に役立ててほしいと認めた書状を黒田に渡している。

これにいたく感動した黒田は、五稜郭陥落時に捕らえられた榎本の助命嘆願に奔走。厳罰を求める長州閥を説き伏せ、ようやく榎本の無罪放免を勝ち取ったのは既に収監から二年半後のことだった。後に榎本が北海道開拓使の任を引き受けたのも、当時北海道開拓使次官だった黒田による必死の懇願が実ったからであることは特筆に値しよう。

榎本は牢獄にあっても読書に没頭し、著述まで行っていた。オランダ留学を通じて、産業技術の発展や殖産興業こそが日本の歩むべき道だという確信がそうさせたのだろう。後に育英黌で学ぶ学生たちを前に語った「学びてのち足らざるを知る」には、旺盛な好奇心とともに、日本の未来のために学び続けた榎本武揚の高い志が伝わってくる。

（おうみ・まさと＝函館榎本武揚を顕彰する会代表）

書と仕事と『論語』

平野甫光

子供の頃から字を書くことが好きだった私が師に就いて書道の稽古を始めたのは、大学卒業後、宝飾の専門店に就職してすぐのことです。商品の化粧箱にかける奉書に書かれた「寿」「御祝」などの堂々とした筆文字に魅せられたのがきっかけでした。

会社専属の筆耕の方に相談すると、「実は僕も書を習っているんだ」と一人の女性書家を紹介してくださいました。平成書道連盟の藤井史甫先生（現会長）です。

銀座にある藤井先生の教室を初めて訪れた時、「奉書の小さい字が上手く書けるようになりたい」と話す私に「小さい字が書けるようになるには、基本の大きな字が書けるようになってからです」とピシャリとおっしゃった言葉はいまも忘れられません。以来、三十五年間、私は会社に勤務しながら藤井先生の下で書を学び続けています。

藤井先生は凛とした厳しさをお持ちですが、普段はとてもお優しい方です。仕事が忙しくてなかなか稽古ができないことを心苦しく思いながら、久々に教室を訪れた時、叱るどころか「あなたがこうして顔を見せてくれるだけで私は嬉しいんですよ」と温かい言葉をかけていただき、さすがに胸が熱くなりました。

三十五年もの間、藤井先生の下で書を続けることができたのは、何よりも思いやりに溢れた先生の人柄に魅せられたからに他なりません。

先生の書を初めて拝見した時、私はその端正な字に、ある種の新鮮さを覚えました。書家ならではの個性的な書のイメージとは大きく違っていたからです。それは、華奢ながら常に背筋を伸ばし、気品溢れる藤井先生のお人柄そのものでした。先生と出逢ってからというもの、その書風と人柄に一歩でも近づきたい。それが私の大きな目標となりました。

しかし、思いはあっても、その実力にはいつも圧倒されるばかり。「なぜ自分はこんなに上達が遅いのだろう」と思うことが度々でした。

藤井先生は言葉で細々と指導されるタイプではありませんから、作品や筆法を見て盗まなくてはいけません。稽古を初めて十年ほど経った頃、私は先生の手本を横に書を認めながら、「あっ、この字は!?」と気づきました。

字のバランスがこれまでになく整い、美しいのです。少し前に書いたものと比べてみても、確かに行間がとれていてボリューム感も出ています。書の美しさには理があると教えられたのは、この時でした。

その頃は銀座の店舗から横浜の店舗に転勤になり、仕事を終えて自宅を通り過ぎ銀座の書道教室に立ち寄って帰宅する。しかも、いくつかの資格試験や書の師範試験にもチャレンジするという、大変慌ただしい毎日を送っていました。限られた時間の中で、仕事、書道、勉強の一つひとつに気持ちを切り替え、集中して乗り切ってきたことが、私の成長を促してくれたのかもしれません。

書道を続ける中で、仕事に対する見方も変わっていったように思います。美しい書には一文字にも作品全体にも違和感なくバランスが取れ、メリハリがあるという共通点があるように、美しい宝飾品もまた然りです。

真珠であれば、真珠層がバウムクーヘンのように均一で厚く美しい円を描いていること、ダイアモンドであれば原石そのものの美しさが大きなポイントです。しかし、当然ながらそれだけでは美しさは表現できません。デザイナーや石のカットを手掛ける職人の技術、さらに仕事に取り組む思いも大きく関わっていま